

第2回世界宗教者平和会議

ルーベン宣言

1974

9月3日ベルギー・ルーベン

「我いばらの上を歩めども、我心揺るがず、花の中を行くがごとし」

1974年夏、ルーベン大学で開催された第二回世界宗教者平和会議は、苦悩する現代世界のすべての宗教者に向かって直接に語りかけたいと願う。

仏教、キリスト教、儒教、ヒンズー教、ジャイナ教、ユダヤ教、イスラム教、神道、シーク教、ゾロアスター教をはじめ、その他諸々の宗教に属するものとして、我々は全人類と一体であり、人類の問題はすべてまた我々の問題であることを認識する。我々の信仰は、問題の有効かつ着実な解決を我々に迫る。我々は、現在人類と地球を脅かす数々の山積する危険に一丸となって当たろうとしている。いや増す世界の混乱が、人類に対する政治的、経済的、社会的、文化的脅威として立ちはだかっていることを我々は直視する。我々は、平和と正義と、より充実した生活をすべての個人と国民にもたすために、我々の社会が直面する大問題と取り組んだ。我々が継承する霊的遺産の尽きることない源泉に拠りつつ、我々は我々と共にある一人の詩人が言い表した真理に心からの共感を送る。

「我いばらの上を歩めども、
我心揺るがず、花の中を行く
がごとし」

我々は、1970年、日本の京都で開かれた歴史的な第一回世界宗教者平和会議に負うところ大であることを感謝を持って認識する。京都において、平和と正義に仕えようとするすべての宗教と国々が守るべき高邁な基準が設定された。ここルーベンにおいて、我々は、それに導かれながらさらに前進をすることを得た。京都において学んだすべてのことのうちで、我々の心を最も強く打ったのは、自己の宗教的伝統をかたく踏まえつつ、しかも他宗教の人々の祈りと献身に対して、心からの尊敬を払うというだけでなく、さらにその尊敬を深めることさえできたということの発見であった。我々は共に、各々の宗教的伝統が主張する一人一人の人間の奪うことのできない

尊厳さを深く顧みたのである。

我々はこの種の会議の経験や、諸宗教機関による多角的な対話の深甚なる経験を通じて、人類の諸宗教の、驕慢と偏見に満ちた長い孤立の時代が今や終焉しつつあることを心から喜ぶものである。かくして我々は、各宗教団体の信仰と、各地域の実情に最も合致する方法で、共に人類に奉仕するという決意を表明する。

戦争は回避しえず、ただ回復しうるのみ

いまや平和は、気の向くままに収受しうるような一つの理想として扱われてはならない。人類が星に達し、また、地球と共に自らを完全に抹殺しうるほどの絶大な力を手にした現状においては、平和は即刻必要とされる實際上不可欠のものとなった。したがって我々は一切の戦争をなくするために、鋭意協力することを惜しまない。

我々はあらゆる宗教者および善意の人々と共に、全面核戦争が単に先に延ばされたり、一時的に回避されたりするに留まるかぎり人類に未来はない、ということ認識するように訴える。危険きわまりない「恐怖の均衡」は、超大国および他のすべての国が、核兵器競争を終わらせるのに一刻の猶予をも許さず、一致した行動をとることを求める。我々は、核保有国に対し、破壊的な核軍備の増強を停止し、現存する一切の核兵器を廃止すべく、核の貯蔵を確実に解体廃棄するよう、世界の諸宗教があらゆる圧力をかけることを強く要請する。また我々は、潜在的核開発能力をもつ他の国々に対しても、その企画を放棄するよう、宗教団体が働きかけることを求める。

京都会議以後、この四年間に、我々は、限定的地域戦争や国内戦争を防止するために、宗教者を動員してその力を効果的に発揮せしめえなかったことを告白する。バングラデシュ、中東、北アイルランド、南フィリピン、南アフリカ、キプロス、インドシナ等においては、他の地域にもまして政策決定者をはじめ紛争当事者が、我々の属する諸宗教団体のメンバーとして大多数を占めている。

インドシナ戦争は1973年1月のパリ和平協定によっても終りを告げず、期待はずれのかの“和平”が宣せられて以来、さらに十万ものインドシナの人命が失われていることを、我々は激しい心の痛みをもって認識する。我々は“汝の兄弟を撃つな”というベトナム仏教徒のスローガンの意味を理解し、かつこれを指示するものである。

戦争が今なお継続するところ、これに巻き込まれたすべて人々の苦しみを思い、我々は深い悲しみを表明する。我々は、その人々とその政府が、交渉、調停、仲裁等による別の解決策を探求し、かつ人命尊重の念と人類の未来像に相応しい方法で、緊急な政治的、経済的、社会的、道徳的変革に努力するように訴える。

良心的宗教者が暴力行使に関していかなる決定を下すにせよ、我々は、世界の宗教的指導者が、何よりも先ず、一切の社会的紛争において暴力を少なからしめるように、そして、明確な目標としては、最終的に暴力を根絶し平和的解決に資するように絶えず努力することを要請する。暴力の原因を排除しようとすることなく、暴力に報いるに暴力を以てすることは、限りない暴力拡大に道を開くことになるであろう。

一切の殺戮と一切の戦争を否定する良心的兵役拒否者は、我々の諸宗教のほとんどにおいて最近とみにその数を増してきている。我々は、全宗教教団に対し、彼等の証しを、つまるところ“まさに人類が戦争を終焉せしめるか、さもなければ戦争が人類を終焉せしめるか”、ということの預言者的しるしとして尊重するように要請する。宗教は、政府に対してこれら良心的兵役拒否者の立場を理解せしめ、彼等の権利を認めるよう主張しなければならない。

解放+開発=平和

平和は、すべての宗教にとって至上の価値であり、あらゆる預言者や教師の示したごとく、単なる争いのない状態をはるかに超えた個人的社会的状態を指すものである。預言者の描いた戦争のない世界とは、健全かつ完全に正義が支配し、万物が一体であるがゆえに戦争を見ないのである。それ故に、国家間の平和を真に求めるものは、まずもって厳しい霊的修練を積み、内心の平和、家庭の平和、町の平和、自然界との平和をもたらすように心がけねばならぬ。

かかる平和は、人々が克己につとめ、闘争的エネルギーを替えて創造的なものに向かわしめ、あらゆる形態の奴隷化に抗し、同胞と神仏に仕えるべく、喜んで自らを捧げるのでなければ決して達成されないであろう。

我々は、人間の解放と、経済的開発と、世界平和とが生き生きとした三つ巴の過程であることを認識するに至った。自らを解放する人々は他者の解放を助けることができる。真に自由なる人々は、隣人に対し搾取と圧政をもって君臨することなく、生産的協力的な社会を形成する。今日、地球上に住むものはすべてかかる根源的な解放、真の自己開発、調和と平和の世界秩序に向って進むことを必要とする。専制、エリート支配の集団、さらに官民の所有をとわず、多国籍企業のあるものなどは、民衆が自らの将来を築くのに参加することを妨げている。我々は各宗教に対し、属する信者が毅然として、藤一のとれた自己の解放と発展を求め、かつまた世界中の同胞の解放と発展を求めるように、振いたたせることを促す。とくに我々は、富裕にして強大な国々で多数を占める宗教者に対し、彼らの政府または経済的文化的諸制度によって抑圧されているアフリカ、アジア、ラテン・アメリカの人々から一切の支配形態を取り除くべく大胆に行動するように主張する。我々は、裕福なる世界が発展途上国の弱みにつけ入って利益をむさぼることや、あるいはまた、南アフリカのように、裕福な白人少数者が、黒人の多数者に対して人種的抑圧を行っていることなどを非難し、すべての虐げられた人々が自己に適する方法で開発を遂行するのを助けるような経済的技術的援助や貿易・投資などの公正な政策が樹立されるよう、宗教者が働きかけることを強く求める。ことに我々はすべての国が、第六回国連特別総会で提唱された新国際経済秩序の実現に向うことを要請する。かかる世界経済秩序の根本的な再編成によってのみ、資源の公正な利用と分配、公正な貿易・財政政策が達成できるであろう。

均衡のとれた人類の成長を願う宗教的責任感から我々は、一人一人の子供に十分な尊敬と機会とを約束し、また子供の生活を支える環境に対しても繊細な配慮を払う社会・経済・人口政策が各国において行われるよう、すべての宗教に協力を求める。

人間の権利と宗教の独立性

我々の求める平和がもっとも危険にさらされるのは、公正な法律の制限をうけない権力が支配する社会においてである。世界人権宣言が口先きだけで指示され、あるいは公然と非難されるところでは、紛争は解決されるよりは抑圧され、かえって暴力的闘争を生ぜしめやすい。国連憲章は、平和の愛好と基本的人権の侵害とは両立しないと主張するが、これは高邁なる宗教的洞察と合致するものである。

こうして我々は、人間の精神を侵害することなく人間の肉体的文化的福祉を保証するような政府の製作が行われるようにと、瞑想し、祈り、かつ証しすることを、あらゆる社会制度のなかに住む宗教者に訴える。市民的・政治的権利の由々しい否定、社会的・経済的・文化的正義の拒否が行われているそのただ中で、宗教教団が国民のために自由を要求し、闘っているばあいには、我々はこれらの宗教者と連帯することを宣言する。

社会に対して真正なる奉仕を果そうとするとき、すべての宗教にとって不可欠のことは、一切のこの世的権力から根本的に独立し、宗教の根源をなす真理にのみ立つということである。それ故に我々はすべての宗教団体が、人間の一般的自由のために奉仕する自らの自由を制限するがごときものと、光善、非公然の紛らわしい関係を結ぶことから自由であろうと努力することを求める。

宗教的諸集団は、社会における自らの機構の正しい在り方を維持すべく細心の注意を払いながら、国の内外をとわず、正義、平和、人権の大義をおし進めようと真摯な努力を傾けるすべての人々と自由に協力すべきである。宗教的諸集団の内部生活においても、平和の大切さを教え、平和達成の手段を重要視するような観点が青年の精神的道徳的教育の中に取り入れられることを、我々は教育的責任を担うすべての人々に奨励する。

国連とその専門諸機関は、人間の尊重を守りかつ高めようとする闘いの全世界的な前線において、宗教的先覚が永く人類に対して喚起してきた使命の多くを、日々果たしつつある。地上における自発結社のもっとも広汎な連帯を示すものとして、ここに代表される偉大な宗教的諸教団は、地上の平和と人間すべての正義のために、国連がその与えられた任務

を遂行することを援助し得るであろう。

我々は、国連の提示する基準を諸国民の生活の中に生かすために不可欠な規約や協定を批准するよう、世界の諸宗教教団がそれぞれの政府に働きかけることを求める。研究と行動を通してこれらの諸教団が国連を強化すべく、自らに、そしてまたその政府に、関心を喚起することを切に求める。

生き残るに足るほど謙虚か

核の脅威によって生じた人類の重大な苦境は、近年、深刻な環境危機によって一層悪化した。即時的抹殺の恐怖は、今や、地球の資源の枯渇・公害・汚染による生命の漸次的絶滅という苦悩にみちた不安と交錯するに至った。人間と自然とに間に正しい関係を作り出すことが、正義と平和のための闘いの不可欠の一部をなすという理解が次第に高まるにつれて、我々の会議に新しい活動分野が生ずるに至った。

万物は本質的に相互依存の関係にあるという宗教的洞察は次代と共に古いものであるが、いまや我々は、人類と自然界との間には、闘争ではなく調和がなければならぬということを一層明確に認識するに至った。我々は、我々の諸宗教教団、およびそれに属する人々に対して、存在の神秘を前にして新たな畏怖の念をもつことを、さらにまた個人的社会的な生活と行動において謙虚な自己抑制の価値を回復することを訴える。宗教に生きる人々は、物質に頼ることを出来るだけ少なくし、質の高い精神的、美的、文化的探求において幸福を見出すことに努め、簡素な生活様式の輝かしい見本を人類に提供すべきであろう。

しかしながら、環境危機の全世界的挑戦は、地球大の技術的政策的変更を求めてやまない。この問題は、科学的、経済的、政治的、道徳的側面を同時に持っている。我々が継承した自然環境のみならず、我々の創造した人工的環境もまた、いまや霊的な視野にたって検討されなくてはならない。宗教者は、自然の権利に対して注意深く尊敬を払いながら自らの生活を生き、市民として勤労者として、それぞれ、環境に関する新しい社会倫理の視野を展開することに貢献しなければならぬ。

宗教的思想家は、科学者、政策樹立者、産業経営者、および世論を喚起または形成するすべての人々と協議しつつ、現代文明に対して、自然を保護し、我々の共同生活の全面的な質を向上せしめるような技術を創造・実現するように努めなくてはならない。この大目標を達成するために、各人および各国のもつ創造的能力を十分に発揮し、もってますますその数を増大する世界の人々のために、社会正義を確固たらしめるようにしなければならない。我々は、地球市民の態度、つまり、食糧、エネルギー、その他、生存の物質的必需品を公正に分ち合うという人間的連帯感を鼓舞するよう世界の諸宗教団体に訴える。我々の住む地球は、宇宙空間に存在する既知のいかなる天体よりも寛慈であって、人類が十分な配慮と尊敬を与えるかぎり、忠実に人類の必要を満たしてくれるであろう。

我々一人一人が祈りと瞑想に向かうとき、我々は、心の転換によって、犠牲心、謙虚さ、自己抑制が与えられるように乞い求める。これらによってさらに正義と開発と自由と平和が推進されることを願いつつ……。ルーベンの会議で我々に恵みを与えて精神が、全地の教会、寺院、神社等々においてこの宣言を受けとるすべての信仰者の心を動かすことを……。このメッセージが彼らによってまた人々に語られるとき、我々の言葉はまた彼らの言葉とならんことを……。この行動への呼びかけが、人類の公共的諸問題を担当するすべての権力行使者の耳に達し、そして顧みられんことを……。

Religions for Peace 